

令和元年度学校評価結果（報告）

※ 達成状況の評価基準は、A：よくできている B：ややできている C：ややできていない D：できていない

		分野	評価項目・取り組み内容	達成状況	学校の取り組み状況	改善方策
学習指導	1	教育課程等	①キャリア発達段階表を活用した系統的な学習内容 ②学校、家庭、社会生活に結びついた体験活動 ③障害の重度・重複化や就労支援への多様な学びの機会 ④地域資源（施設・人材等）を活用した教育の推進	B	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア発達段階表に基づいて、各学部・学年・授業担当で授業計画をしているが、授業との整合性についての検証までには至っていない。 ・校外学習や現場実習等については、各活動目標を明確にした計画を立て、実施、反省を行っている。 ・肢体不自由の児童生徒について、複数の教員が関わることによる共通理解や積極的な支援体制が、昨年度よりも充実してきた。 ・メンテナンス講座（清掃指導）、進路セミナー（卒業生による座談会）、身だしなみ講座、ハローワークや職業自立センター等への訪問等、生徒の進路決定や将来地域社会で生活する上で大切なことを学ぶ機会となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校は教員の入れ替わりも多いので、再度キャリア発達段階表についての周知を図る。 ・肢体不自由の児童生徒が安心して生活できるための、施設設備の充実を図りたい。 ・新学習指導要領の導入に伴う学習内容の見直し、改善。
	2	学習指導	①正確な実態把握に基づいた目標設定と指導・支援方法 ②わかりやすい教室環境、教材・教具等の工夫 ③児童生徒が主体的・対話的な深い学習の充実 ④評価基準による評価と児童生徒への振り返り ⑤個別の指導計画の共通理解とPDCAサイクルの見直し	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」を作成する際には、本人・保護者の希望等の聞き取りをしっかりと行うだけでなく、過去からの引継資料や検査結果等を基に、長期的な視点に立って今年度の目標設定や支援内容を決めている。また、利用している福祉サービスや医療機関等を把握することで関係機関を確認し、必要に応じて連携支援会議を実施している。 ・「個別の指導計画（各教科・科目の指導）」を作成する際には、まず教科ごとに年間指導計画を作成し、その後児童生徒それぞれの実態に合わせ、年間・前期・後期の目標や授業ごとの支援内容・手立てを設定している。また、児童生徒が主体的に学べるよう、体験学習や実習等における事前・事後学習を丁寧に行い、自身の振り返りや自己評価の機会を設けている。 ・高等部に導入したタブレット端末の活用についても、各授業で工夫されている様子が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領の導入に伴い、そのねらいや様々な変更点について先生方に連絡、周知をはかる。 ・「何を学ぶかだけでなく、どのように学ぶか、何ができるようになるかも重視して、「生きる力」を確実に育むことを目指す。 ・評価について、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点から行う。 ・教務ハンドブックの改訂が急務である。
	3	自立活動	①自立活動の時間での実態把握に基づいた学習集団の編成 ②6区分の優先順位に基づいた指導	B	<ul style="list-style-type: none"> ・発達検査や行動観察等による実態把握をもとに、最も重点的に取り組むべき区分を決めてそれに基づいてグループ編成をした。 ・学年が上がる中で、実態を見直しグループを再編成したところもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小6から中1、中3から高1への引き継ぎを自活部員が中心に行った。 ・発達検査ガイダンスにある該当学年でなくても、必要と思えば実施することの共通理解をする。

	分野	評価項目・取り組み内容	達成状況	学校の取り組み状況	改善方針
児童生徒支援	4	個別支援	B	<ul style="list-style-type: none"> ・支援の必要な子どもについて毎月の支援部会で話し合っている。担任からの相談に対しては、どこまでの関係者が話し合いに参加したらよいか見極めながら、校内のみ、外部の関係機関、医療機関、保護者等に入ってもらって、話し合いの会議を持っている。様々な関係者の意見を出し合うことで、共通理解とよりよい支援策がでてくることが多い。特に福祉や医療との連携により、児童生徒の生活が安定することで学校生活でも落ち着いて過ごせるようになったケースは多い。 ・自立活動の個別のファイルを作成し、次学年・学部へ引き継ぐ。 ・個別の支援計画の年間目標を保護者の思いや考えをうけながら計画することができ、確認をしながら進めることができた。 ・支援会議を通じて話した内容や学部として共通理解必要な事柄については学部会や学年会等で伝えることができた。 ・校内で必要に応じて支援会議を随時開いている。支援会議を通して、関係機関、校内関係部署の教師、担任、(必要に応じて保護者)にも参加してもらい共通理解を図るとともに、合理的配慮についても話し合う機会を設けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい時からの保護者への理解啓発が十分でない、中高等部になっても、福祉や医療とつながっていないケースがある。高等部になつての問題行動を防ぐためにも、早期からの保護者支援の充実が求められる。保護者向け通信などを通して、早期からの子供へのかかわり方や、将来を見据えた支援方法を考えるきっかけを作りたい。 ・学部間の移行支援がスムーズに行えたかどうか、検証する。 ・支援部での話し合いが活発になるように担任だけで課題を抱え込まないで各学年、学部で十分に話し合ってから支援部や支援委員会で学部を超えて検討し、学年、学部全体で課題を共有し、チームで支援にあたる。 ・校内での支援の在り方についても様々な意見を出し合ってよりよい支援が行えるように支援会議の内容を充実させる。 ・担任だけで課題を抱え込まずに、些細なことであっても各学年、学部、支援部(コーディネーター)に相談したうえで、課題解決に向けて支援する。
	5	生活指導・支援	B	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の実態に応じた指導を行うために、実態把握を丁寧なことを心掛けている。フォーマルな実態把握の一つとして発達検査を行い、子に応じた支援方法を、担任と一緒に考えている。 ・自立活動の時間の指導や日常生活全般を通してのSSTなどの指導により、学校や社会での決まりやマナーについて指導している。学校で指導していることは、機会あるたびに家庭にも伝え、定着を図っている。 ・障害特性の理解、保護者との情報交換や発達検査等で児童生徒の実態を正確に把握し、適切な指導を行っている。 ・適切な支援によって生徒会行事などに主体的に取り組みさせている。 ・交通ルールを学んで安全に移動したり、社会のマナーを守ることでトラブルのない生活を送ったりできるように指導をしている。 ・連絡帳を活用して家庭との連携を密にするとともに各学期にアンケートを実施して、いじめの防止・早期発見に努めている。 ・校外学習等を通じて、公共交通機関や公共施設の利用の仕方や交通ルールについて実際の体験を通して身につけられるように計画、実施している。 ・連絡帳を活用して家庭との連携を密にするとともにアンケートを実施していじめ防止、早期発見に努めている。 ・交通安全教室を、年に2回行うことができた。警察官の方に話をしていたり交差点の渡り方や自転車の正しい乗り方などの実践練習もあり、有意義な時間が持てた。 ・問題解決に向けて管理職、生徒指導部と相談の上、連携し取り組んでいる。 ・高等学校との交流で、生徒会活動として参加し、コミュニケーション能力が身につくよう取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検査結果の保護者へのわかりやすいフィードバックとそれから得られた知見を用いての指導支援方法の具体を提示する。 ・個々の子どもの指導目標を学年学部、家庭等で周知し、どの場でもだれがかかわっても、目標を見据えた支援ができるように共通理解を徹底する。 ・職員研修会の実施等専門性の向上。校内支援会議で指導の検討。 ・計画段階から児童生徒が参画、役割を果たすことによる主体性の育成。 ・校則、交通安全などのルールをわかりやすく示す。 ・担任と相談しやすい環境づくり。困ったことを相談できる力の育成。 ・校外学習等の事前、事後学習、生活単元学習などでの学習を充実させていく。 ・職員研修会の実施等専門性の向上。 ・計画段階から児童生徒が参画する活動、地域ボランティア活動の推進。 ・校則、交通安全などのルールをわかりやすく示す。 ・担任と相談しやすい環境づくり。困ったことを相談できる力の育成。 ・交流を通して同年代の生徒との人間関係の育成を図る。
	6	進路指導	B	<ul style="list-style-type: none"> ・進路セミナーの開催、現場見学会の実施など地域資源を活用した情報の提供 ・学部単位・学年単位を対象とした進路相談会等の保護者への細やかな情報提供 ・早期からの体験活動や実習の実施による実体験に基づいた意欲・能力の伸長の取り組み ・本人・保護者との懇談を通じた適切な自己理解に基づいた目標、実習先の設定 ・進路学習の事前・事後学習を通して、目標を考え、自分の進路選択に役立てる。また、現場実習を通して就労意識向上に取り組んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉、行政、医療などの各関係機関との情報の共有を進めてチームでの支援体制を確立する。 ・説明会、懇談等を利用し、本人、保護者へのより一層の情報提供の充実を図り適切な進路目標の設定を助ける。 ・実習後の事後指導の一層の充実を図る。 ・自己理解に努めさせ、本人に合った目標設定・進路希望を持たせる。 ・進路学習(現場実習など)を通して、就労意識(福祉、企業)を高めさせる。

	分野	評価項目・取り組み内容	達成状況	学校の取り組み状況	改善方針
教育課題	7	健康・安全教育	B	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症等への早期発見をするため、朝の健康観察、集計を行った。 ・インフルエンザ等の流行期には、保健室前に欠席状況を掲示したり、週明け週末にメールを配信した。 ・給食試食会の実施やアンケートを集計し食べ物に関心を持ってもらうようにしたり、意見を献立に反映させた。保健室前に飲料水の糖分含有量や脂肪やカロリーを視覚でわかるように掲示し、児童生徒や保護者に意識を向けてもらえるようにした。 ・外部講師を招いて交通安全教育を実施した。自力通学において教師が付き添い登下校指導を行った。 ・AEDの点検を毎日行い、必要に応じて救急対応訓練、ヒヤリハット報告等を行い安全に務めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も関係機関との連携及び適切な情報発信を続ける。 ・食育を意識した献立の提供と児童生徒及び保護者への啓発を行う。 ・健康・安全に関する研修及び訓練を充実させることで、安全で安心な学校作りの取組を引き続き行う。
	8	防災教育	b	<ul style="list-style-type: none"> ・警察や消防署の協力をいただき、年4回の避難訓練を実施し、課題等を検討する。 ・日時を設定して南海トラフ地震津波一斉避難訓練（シェイクアウト訓練）を実施した。 ・小・中・高とも引き渡し訓練が実施できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事後アンケートをもとに、改善点や課題を検討する。 ・事前を打ち合わせを綿密に行う。 ・係の分担を明確にする。
	9	情報教育	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ipadの購入に関しては2年目に入り、主に高等部の生徒や教師が活用するためのツールやアプリ等の充実が図られた。PC等の保守管理についてはwindows7のサポート終了に伴い、windows10への移行を進め対応した。WiFiなどの環境を整え全ての教室でipadやpc等の接続が可能になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・TVやプロジェクターとipadやPCとの接続するための端末の整備をより一層進めて、視覚的な支援の充実を図る。視聴覚機器や情報機器等の故障や不足などに対応し整備を進める。
	10	人権教育	B	<ul style="list-style-type: none"> ・四郷地区の学習会への参加。校内人権教育研修会では、姫路市教育委員会、人権教育課の先生をお招きして講演していただいた。「人権感覚を磨く」というテーマの話はとてもわかりやすく、日々の子どもたちへの接し方を考え直すいい機会となった。その他の取り組みとしては、西高入教幹事会への出席、各種研修会への参加、人権同和学習資料の編集、各種調査への回答、報告書作成などを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の人権感覚を養うためにも、より多くの研修会が持てたらよい。（正式な形ではなくても良い）
	11	交流及び共同学習	B	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者や新転者研修用に交流及び共同学習の冊子を作成し、新年度の初めに交流及び共同学習の重要性や本校の取り組みを説明する機会を設けた。 ・居住地校交流では、中学部の生徒の参加率が昨年度よりも上がった。今年度から廊下に居住地校交流の様子を掲示するなど居住地校交流に行っていない生徒への啓発も行っている。 ・居住地校交流では、特別支援学級での交流を基盤に休み時間に任意で集まった通常クラスの生徒と交流するなど弾力的な交流を行うことで無理のない交流がみられた。 ・中学部では一昨年から事前の交流アンケートや障害理解授業を行い、障害への段階的な正しい理解啓発に取り組んでいる。小中高等学校、学校の事前の打ち合わせを丁寧に行い、よりよい交流に繋いでいる。中高の学校間交流では貼り紙などの間接交流も行い、互いの学校生活を知る機会を設けた。 ・学部間交流は相手クラスを一つに絞って無理をせず、自然な形で行った。休み時間にけん玉を教えに行くなど、学部をこえて触れ合う姿が見られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度から姫路市の副次的な学籍が始まる。これまで相手校の受け入れに温度差がみられたが、今後、児童生徒の居住地校交流の受け入れ姿勢が変わることを期待していきたい。また、事前の打ち合わせを密にし、両校の児童生徒の実態に応じた交流内容の充実や児童生徒の主体的なコミュニケーションの工夫が求められる。 ・居住地校交流の事前事後学習を丁寧に行い、将来の地域生活を見据えていく。②中学部で実施している、交流アンケートや障害理解授業が小学部から実施できるとよい。②本校の児童生徒に対する障害受容も含めた自己理解の教育の充実が共生社会を目指していく上で必要である。③学部間交流では、学校生活の中で無理なく継続していくことができる内容を検討し、年間を通して交流回数を一定程度、もつことが望ましい。

	分野	評価項目・取り組み内容	達成状況	学校の取り組み状況	改善方策
学校運営等	12	教職員の専門性	B	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動の授業実践の研究を各学部の連結を目指して取り組んだ。 ・夏休みと12月に兵教大の岡村教授を迎えて自立活動の研究授業を行い指導助言を得た。 ・課題研究グループを作り、年3回程度の研修を行い、自己研鑽に努めた。 夏休みを中心に研修研究部を始め支援部、自立活動部、進路指導部、生徒指導部、保健部、防災管理部が研修会を持ち専門性の向上に努めた。	<ul style="list-style-type: none"> ・年度末に年間の研修、研究についてのアンケートを実施し、達成された点、改善が必要な点を明確にして、改善していきたい。
	13	センター的機能	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談会を年2回（4回）実施し、保護者に早期から本校のことを知ってもらう機会を持っている。 ・地域の小中学校への巡回でコーディネーター等と連携ができていて、就学、転入学に関する相談も早めに行えるようになった。今年度も小学校からの紹介で本校の見学に来て進路を考え直した保護者もいる。 ・今年度は「教材教具研修会」を1回のみ開催した。もっと多くの研修機会や気軽に相談できる機会を提供できた良かった。 ・本校で実施した年2回の播磨西地区特別支援学校ネットワーク連絡会議に播磨西地域の市町の教育委員会や事務所の参加もお願いしたことにより、地域の特別支援教育の課題についての課題や今後に向けた取り組みについて各市町の教育委員会の担当者とも、地域の特別支援教育の課題について話し合うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姫路市神崎郡とも就学前の療育機関が充実している。待機時間が長い期間もあり、早期に相談できる保健師さん等をキーパーソンとして本校での相談の活用も働きかけていきたい。 ・不登校になってしまったからの相談が多い。各学校に早期に気づき支援ができるよう理解啓発を行っていききたい。 ・相談には支援部全員でかかわっていけるよう校内の理解も促す必要がある。 ・中学校からの依頼が少ない。中学校への理解啓発をどのようにしていくか課題である。
	14	家庭・地域との連携	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は緊急時等だけでなく、インフルエンザ情報もメール送信している。 ・各学部、各校務部で大きな行事の終了後、随時HPに掲載している。また児童生徒に文書（行事案内・理事会の報告・通信等）を、持ち帰らせている。 ・オープンスクール、運動会や体育祭、ひめよう祭等は関係各機関、関係者、地域の方々にも案内している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者には引き続きメールの既読確認の協力依頼を行う。 ・今後も可能な範囲で、HP等を更新していく。 ・連絡事項や行事等の詳細等もできる限り、早く連絡する。
	15	校務運営	B	<ul style="list-style-type: none"> ・姫路特別支援学校ランドデザインの中に教育目標のほかに児童生徒像、学校像、教職員像等を図式化した。共通理解を図り、自立活動と交流及び共同学習を柱とした教育活動に取り組んだ。 ・課題別研究グループ研修を年2回、自立活動6区分別研修を年2回行い、学部を超えて学び合い、若手教職員の育成及び教職員の資質向上に取り組んだ。 ・水曜日を定時退勤日として設定しており、職員朝礼で呼びかけた。ハラスメントについては職員研修を行い、自己チェックを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員校内研修のさらなる充実 ・研究授業発表会のより一層の充実と、情報発信と共有化の推進。 ・課題別研究グループの成果、校外研修等の報告や資料をグループウェア等で共有できるようにする。 ・業務負担の偏重の改善に向けた業務分担の調整。
1 学校評価の実施方法 今年度も昨年度と同様に、職員、高等部生徒（本校Ⅱコースと分教室）と交流（学校間交流と居住地学校交流）の相手学校、センター的機能の支援先の学校にアンケートを実施した。 2 居住地・共同学習・地域支援等 関係者評価 ・交流ではお互いに生徒たちも慣れてスムーズな活動ができている。また、交流の中で学校紹介を行ったりすることにより、相手校の生徒とも和やかに楽しく活動ができた。 ・地域支援では丁寧な対応や具体的な対応・アドバイス等、とても有り難かった。 ・事前打ち合わせや準備等で大変お世話になった。もっと別の新しい交流も考え、充実したものにしたいと考えている。					